陽炎の魅せる夢

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陽炎の魅せる夢

【Ｎコード】
Ｎ９６３９Ｅ

【作者名】
並盛りライス

【あらすじ】
魔女に魅せられた少年が虚実の境界をさまよいながら夏の白昼夢を見続ける。

八月のある猛暑日に、僕は広場を歩いていた。
彼女はそこに座っていて、まるで世界が始まった瞬間から其処にいたみたいだった。
僕が思ったままの事を言うと、彼女は少しだけ、はにかんで、すぐに無表情になった。
「全く同じ事を三回言われたわ」
「なんでずっと其処に居るの？」
「ほら、また同じだ」
できるだけ、誰も言いそうにないことを言おうとして
「彼氏でも待ってるのかい？」
と言うと彼女は薄気味悪そうに、こちらを見ていた。
どうやら失敗したらしい。
「ねぇ、貴方って馬鹿なの？」
僕は、何も言わなかった。
「私に声をかけたのは、貴方が初めてよ」
「だったら……」
「私は貴方にしか見えないのよ」
「また嘘なのかい？」
「信じなくてもいいわよ。信じて欲しいから嘘をつくわけでもないし」
なんだか頭がクラクラするぐらい魅力的だった。
僕は彼女に好意に近い感情を抱いた。
なんにしても、彼女が僕に向かって話しかけてくれた事が嬉しかった。
彼女の黒い髪は、ボサボサで、おまけに地面に着きそうな位に長い。
そして黒いワンピースの丈も地面に着きそうだった。

「魔女みたい」
僕がそういうと、僕の事を上から下まで念入りに観察しだした。
「貴方は、これといって何か特徴があるわけじゃないわね。どこにでも居そうというか、気付いたら其処らじゅうに居るようなタイプね」
反論はしなかった。
僕はどこにでも居るのだ。
「ねぇ、私の猫を知らない？」
「猫？さぁ知らないな。どんな猫なんだい？」
彼女は呆れたように言った。
「猫は猫よ。それ以外に何て説明するのよ？」
「名前とか？」
「猫を捜すのに名前が必要？」
「例えば、外見に特徴はないの？　色とか形とか」
彼女は思案してから静かに言った。
「ないわ。色も形もないの、ただそれは猫なのよ」
彼女が嘘を言っているとしたら、それは何のための嘘だろうか。
僕をからかっているだけなのだろうか。
「じゃあ、探しようがないじゃないか」
「誰が探してくれっていったのよ。猫を知らない？って聞いたのよ私は」
「知らないな」
彼女は別段、落胆する訳でもなく
「そう」
と言った。
僕は少しだけ後悔した。
本当はもっと気の効いた返し方があったのではないか。
「シドよ」
「え？」
「猫の名前はシド。さっき、そこで別れたの。あの子は暑いのは嫌

いだっていうから、私は言ってやったわ。それなら南極にでも行ったら？　ってね」
彼女の話は飛躍し過ぎていてよく解らない。
「つまりそれは、君の猫が？」
「そしたらあの子、別の男のところへ行ったわ。彼女には何人も男が居るのよ。子供だっているかも。あ、煙草持ってる？」
僕は煙草を吸わないので、持っていないと言った。
なぜか、彼女の言葉が耳について離れなかった。
同じことを前にも誰かに聞いたかもしれない。
「でも、私にはあの子しか居ないの。だから、行かないでくださいって言ったわ」
彼女は煙草がないことにイライラしながら、爪を噛んだ。
「それで、君の猫はどうしたんだい？」
「何も言わないわ。ただ、笑って、どこかに行ってしまった……」
言い終わると、彼女は首を何度も振りながら両手の全ての爪を噛んでいった。
「どうしたの？」
「どうもしないわよ」
彼女は少し怒っているようだった。
怒りながら、少しだけ悲しそうな顔をしていた。
「貴方は良いわね。どこにでも自由に行けるし、好きな時に好きな場所に居られるなんて」
「そうかな」
「私は、この場所から離れた事はないし、離れる事はできないの。でも、それを可哀想なんて思われるのだけは、ごめんだわ」
彼女は、黒い瞳で僕を見た。
僕は、なんだかドキリとして、その瞳に吸い込まれそうになった。
その時、僕は気付いたんだ。
色も形もない猫が、こちらを見ているのを。
その姿を僕はどこかで見たような気がしたが、思い出せなかった。

「あれがシド？」
「え、どこよ」
彼女の向いている方向からは、シドの居る位置は見えないのだ。
それを知っていて、わざと隠れているとしたら嫌なヤツだなと思った。
「どこよ、シドはどこ？」
彼女は、懸命に見渡すが、建物が邪魔になって見えない。
そのうち、猫はクルリと後ろを向いて立ち去った。嫌なヤツ。
僕はシドが居なくなった事を彼女に告げた。
がっかりする彼女を見ていると、何だか急に腹が立ってきた。
「そんなに、あの猫のことが気になるのかい？」
「そうね、なんだか、気になるのよ。あの子、いつも死にたがってたから……そういうのに憧れちゃう自分が居るの」
「あの猫が死にたがってるの？」
「シドだけじゃない。みんな死にたがっているのよ、ただ、それに気付いていないか、気付いていても忘れる事ができる人だけが生きようとするの。あの子は気付いてしまったのよ」
彼女の言う事は難しい過ぎて半分も理解できなかった。
彼女がシドに会いたがっているという事だけは、解った。
「僕が、アイツを連れてこようか？」
「貴方も、つくづく変わってるわね。同情は嫌いよ」
「自分の為にやるのなら良いのかい？」
「自分の為？」
「僕は君の事をとても気に入っている。自発的に僕は君を助けたいと思っている。それは僕の為じゃないかな？」
「そうね。貴方がそう思うなら、そうなんじゃないの」
辺りは少しだけ暗くなっていたが、彼女のワンピースの黒は月明かりに映えていた。
彼女が爪を噛む姿は、痛々しく、滑稽にも思えたが、僕はその滑稽な姿にすら魅力を覚えている。

たとえ、それが僕の一方的な好意であっても、彼女の為に何かしたいと思った。
これは同情なんかじゃないんだ。
「純粋に、誰かの事を好きになるってのは、それだけで素晴らしい事なんじゃないかな？」
「貴方って、本当に変よ」
そういって彼女は何かを考えていた。
「ええ、確かに純粋に死について考える事と同じかもしれない」
「そうかな」
「貴方がシドを連れてきても、私は貴方のことを好きになったりはしない。それは貴方が純粋に私のためにやったことで、私がシドに対して純粋な感情を持つことは変わらない」
僕は少しだけがっかりした。
やはり期待してもいたのだ。
「ねぇ、じゃあ貴方がシドを殺したら、私はあなたに対して好意を抱くようになるのかもしれないわ」
「僕が？　君のシドを殺すのかい？」
「そうよ、怖いの？　それとも私のことが嫌になった？」
「でも、君はそれでいいのかい？」
「いいわ、あの子は死にたがっているけど、実際に死のうなんて思ったことはないの」
「ふーん」
「でもね、私なら可哀想なあの子の背中を押してあげることができるのよ」
彼女の声は確信に満ちていた。
「それで、君はシドを殺したいの？」
「そうゆう訳じゃないけど、貴方が私を殺すよりは、すごく簡単な気がするわ」
僕が彼女を殺すのは違う気がする。
「僕はあのシドを殺せるだろうか」

「大丈夫よ、貴方なら」
すっかり夜になったので、僕は家に帰った。
そして、彼を殺す方法を考え始めた。
できるだけ、苦しめて、惨たらしく殺す方法を考えなければ。
そしてそれは、彼女にとって、きっと良いことなのだろう。
彼女はいつもあの場所にいて、僕だけを待っている。
そして、綺麗な服や、化粧品、指輪なんかも買ってあげよう。
あんな猫なんかの事はすっかり忘れてしまうだろう。
僕は、何度も練習した。
ナイフの使い方や、毒薬の作り方も勉強した。
そして、ついに成功した。
「ねぇ、僕はついにやったよ」
彼女は、さっきから、一言もしゃべろうとしない。
「どうしたの？　なんで黙ってるのさ」
昨日はあんなに、活き活きとしていた広場の女神像は、なんだか気味が悪い位に静かだった。
僕は血のついたナイフを広場の噴水に投げ入れた。
僕は夏休みに、彼女と行くはずだった旅行のことを思い出した。
彼女って誰だっけ？
確か同じサークルの猫みたいな女の子で。
広場の女神は何も答えない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9639e/

陽炎の魅せる夢

2010年10月8日15時08分発行